



静脩

1967年 11月

Vol. 4, No. 4

The Kyoto University Library Bulletin

数 学 図 書 室 の 今 昔

福 原 満 洲 雄

私は東大の数学科を卒業して、大学院に2年間在学の後、北大に赴任。ここで6年間を過して九大に移り、工学部に2年、理学部に約10年、母校東大に戻つて約17年、さらに京大数理解析研究所に転任となったので、これまでにそれらの数学の図書室を利用してきたし、数学の図書室の変遷を実際に目のあたりにみてきた。

東大の数学教室はいうまでもなく日本の代表的な数学教室ではあるが、私が学生時代の数学の図書室は誠に貧弱なものであった。詳しい数字は知らないが、現在でも蔵書は2〜3万冊の程度だから、当時はせいぜい3〜4千冊位だったのだろう。雑誌の種類も20位と思われる。専任の図書係もなく、教室ただ1人の助手が図書係を兼ねていた。

そのころ理学部の数学教室は東大、京大、東北大にあっただけで、その中で最も豊富な蔵書をもっていたのは東北大の数学教室であろう。東大では見ることのできない雑誌も「東北数学雑誌」との交換で入手していたようである。3数学教室のうちで最も新しい東北大学数学教室の創立時の中心であった林鶴一教授が「東北数学雑誌」の刊行に力を入れたその見識に敬意を表したい。

東北大学の数学教室が誕生してから長い間数学教室の新設がなかったのであるが、昭和5年、私が赴任する1年前に北大に理学部が新設されたのであった。吉田洋一、功力金二郎、河口商次3教授のうち、東北大出身の河口教授が大きな抱負をもって図書室の整備に当られた。世界の大勢に遅れないように研究を進めるには旧3教室の規模では不十分であるというので、紀要を刊行して雑誌の交換に努力する一方、数学専用の書庫のほかに雑誌閲覧室も設け、専任の係員も2名を配置するといった調子で、東大の数学図書室より知らなかった私にはずいぶん立派なものに見えた。

北大につづいて新設された阪大理学部の数学教室は完全4講座で出発したから、3講座の北大数学教室より人員構成の面でも、財政的の面でも北大よりは有利だったようである。このようにして新しい数学図書室は北大と阪大によって代表されるようになった。

昭和14年に九大に理学部が新設されることになり、図らずも私が数学教室設立の責任を負うことになった。図書室の整備については北大での見聞を基にし、研究活動の源泉として雑誌の蒐集に最重点を置くという方針を立て、バックナンバーの購入にできるだけの手を尽した。発足時は私がただ1人の教授で、本部均、北川敏男君が助教授、古屋茂君が助手、佐藤徳意君が副手、ほかに図書係1名といった組織だったので、型録を集めたり、発注をしたり

するのに教室の全員が協力した。やがて第2次大戦となり図書輸入の途が閉されるのであるが、その前に最初に予定したバックナンバーの大部分は入手することができた。発足時の規模は小さかったようであるが、予算的規模は北大、阪大と同程度であった。さらに昭和17年には完全5講座となって、日本で最大規模の数学教室となった。同年に名大理学部も新設され、数学教室はやはり完全5講座として発足することになった。

終戦後東大に戻ってみると、教室の助手は2名、雇員1名で、助手1名だけより少しはよくなったとはいっても、以前の北大にもおよばない実状には全く情けなかった。これから東大数学教室近代化のため予算の増額、人員組織の充実の努力がつづけられた。そのうちに数学の重要性が次第に社会的にも認識されてきたので、講座倍增計画を打出し、最近に至って漸く殆んど完全な9講座から成る数学教室となり、図書室も日本の代表的な教室にふさわしいものとなってきた。

しかし戦後急激に増大した文献は、従来のような網羅主義的な蒐集計画では財政的にも空間的にも破綻を来たすことが明らかとなってきた。また研究の急速な発展は迅速な情報活動を要求する。このようにして図書館の近代化ということが日本でも問題とされるようになってきた。この秋に当り全国共同利用研として京大に付置された数理解析研究所の図書室が数理関係の専門図書館として果すべき役割は重大である。

蒐集計画は全国的視野に立ってなされるべきであり、主要な数学図書室間の緊密な協力を進めるために、相互に情報を提供する組織も必要であり、情報活動に電子計算機をどのように活用するかも今後の課題となる。学術会議の長期研究計画に織り込まれている文献センターの構想とも関連づけて今こそ専門図書室の今後あるべき姿について慎重に検討し、将来計画を確立すべきであろう。

(数理解析研究所所長)

目 録 カ ー ド 検 索 へ の 手 引 き

附属図書館の目録カード室が移転して、目録が整理統合されたことは、前号でお知らせしたが、この機会に、その構成および検索方法について、簡単に説明しておこう。

I 全学総合目録（1階目録カード室）

A 和漢書書名目録

- 1 昭和39年7月（受入）を境にして大型カード（新）と小型カード（旧）に分れている。
- 2 書名の五十音順に排列されている。（原則）
ただし小型カード（旧）は次のような特殊な取り扱いをしている。
- i 書名の頭の字が1音の漢字である場合は、2音のものおよび仮名よりも前に排列されている。

例 技術の歴史 **ギ**ジュツノレキシ

菊と刀 **キ**クトカタナ

- ii 長音のウ（またはー）はア行に排列しないで「ン」の前に排列されている。

例 コア…コワ…コウ（コー）…コン

- iii 頻出する漢字（同音は画数順）または語はブロックを設けてまとめて排列されている。カード箱の見出しをよく見て検索して